

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語詩を和訳することは解釈を促すのか：英語教育における文学の在り方を探って
Author(s)	小野, 章; 馬越, 董
Citation	英語英文學研究, 67 : 113 - 127
Issue Date	2023-03-30
DOI	
Self DOI	10.15027/54584
URL	https://doi.org/10.15027/54584
Right	著作権は、執筆者本人と広島大学英文学会に帰属するものとします。
Relation	



英語詩を和訳することは解釈を促すのか —— 英語教育における文学の在り方を探って ——

小野 章・馬越 堇

1. 研究の背景と目的

平成 30 年 3 月 30 日に改訂された『高等学校学習指導要領』は、令和 4 年度から年次進行で実施されている。同要領では、育成を目指す資質・能力の三つの柱として、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力」と「学びに向かう力、人間性等」が定められている。これらのうち最後の「学びに向かう力、人間性等」に関し、『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 外国語編 英語編』（以下、『解説』）には次の説明がある。

外国語教育における「学びに向かう力、人間性等」は、生徒が言語活動に主体的・自律的に取り組むことが外国語によるコミュニケーションを図る資質・能力を身に付ける上で不可欠であるため、極めて重要な観点である。（中略）生徒が興味をもって取り組める言語活動を段階的に取り入れたり、自己表現活動を工夫したりするなど、様々な手立てを通して生徒の主体的・自律的に学習に取り組む態度の育成を目指した指導をすることが大切である。（p.16）

「学びに向かう力、人間性等」の涵養には、生徒が「主体的・自律的に学習に取り組む態度の育成を目指した指導をすること」が重要となる点が指摘されている。また、主体的・自律的な学習態度を育成する具体的な手立てとして、「生徒が興味をもって取り組める言語活動を段階的に取り入れたり、自己表現活動を工夫したりする」ことが挙げられている。

「生徒が興味をもって取り組める言語活動」や「自己表現活動」の在り方を探ることが肝要となるが、本論ではそのような活動の可能性を解釈に求めたい。小野・平川・柿元（2016）では、量的・質的な実験の結果を踏まえつつ、解釈が英語学習者の興味を掻き立てることが報告されている。しかしこの研究では、解釈が英語文学の研究者でもある授業実践者自身のものであった。より広範な英語教育を想定した場合、例えば中等教育の英語授業において、専門的な文学解釈を持ち込むことは現実的ではない。

TILT（Translation in Language Teaching）を軸に、外国語教育において母語使用を見直そうとする動きがある（Cook, 2010）。もっとも日本では、いわゆる文法訳読式の授業を中心に、母語である日本語が英語教育の現場でこれまでも

使用されてきた。しかし、このような授業での日本語使用は、正確な字義理解に主たる力点が置かれたものであって、解釈とは関連付けられてこなかった。また、TILTに基づいたこれまでの研究でも、母語使用と解釈の関係は明らかにされていない。

以上の背景を踏まえ、本論の目的は、英語を和訳することが解釈を促し得るのかを探ることである。英語の和訳ならば、特に専門的な知識がなくとも学習者は抵抗なく取り組めるはずである。仮に英語の和訳が解釈を促すのであれば、解釈は学習者にとって身近なものとなろう。そして、和訳を通して学習者に解釈を促す活動は、英語学習者の興味を掻き立て、ひいては「学びに向かう力、人間性等」の涵養に貢献するはずである。

2. 仮説と研究課題

研究課題の設定に際し、解釈を定義し、訳で使用するテキストを定めておく必要がある。

前述の小野・平川・柿元（2016）における解釈は文学理論に基づいたものであり、本論が想定する広範な英語教育（中等英語教育等）の現場にはそぐわない。小野・清水（2018）は、エーコ（1993; 2002）を元に、解釈を「書かれたものを、その言語等の妥当な意味理解に基づいて、読者がそれなりの説得性をもって自由に展開する読み」（p.230）と定義している。この定義にある「言語等の妥当な意味理解に基づいて」によって、外国語教育にありがちな誤読は解釈に含まれないことになる。また、「読者がそれなりの説得性をもって自由に展開する読み」によって、文学理論等の知識が無い学習者にも解釈の実践が可能となる。本論では、この小野・清水（2018）の解釈の定義を採用したい。

訳の対象となるテキストの候補には、大別して説明文とナラティブが挙げられる（DuBravac & Dalle, 2002）。Rosenblatt（1978; 1995）によると、解釈は読者が実践するものであるため、説明文もナラティブも解釈に開かれている。しかし現実には、そもそも審美的な目的で書かれているナラティブの方が説明文よりも読者の解釈を許容する度合いが強い（Rosenblatt, 1978）。よって本論では、和訳の元となる英文に、ナラティブの一形式である詩を用いることにした。様々なナラティブから詩を取り上げたのは、例えば小説よりも詩は通常短いため、訳出にあたってテキスト全体を把握しやすいと考えたからである。

資質・能力の三本柱のひとつである「学びに向かう力、人間性等」を育成する手立てとして、「生徒が興味をもって取り組める言語活動」や「自己表現活動」が『解説』には挙げられている。このような活動を実践するためには和訳が有効なのではないかという考えから、本論では次の仮説を立てる。

仮説：生徒の興味を掻き立てるような活動が、和訳を通じ学習者に解釈を促すことによって実践される。

この仮説中下線を引いた部分、すなわち、和訳をすることが学習者の解釈を促すという部分を検証すべく、本論では次の通り研究課題を設定する。

研究課題：英語詩を和訳することは英語学習者に解釈を促すのか。

3. 調査方法

上記研究課題に取り組むため、本論は調査を実施した。調査方法（調査協力者、調査材料、調査手順）について説明する。

3.1. 調査協力者

本来ならば、本論が想定する学習者である高校生に調査協力を依頼すべきであったが、実際には高校を卒業したばかりの学部1年生を対象に調査を実施した。コロナ禍であったということもあり、本論の筆者のひとり（小野）が担当する学部の授業を用いることで、確実に調査が出来ると判断したためである。

調査が実施された授業は学部1年生向けのものであり、内容は英語文学を概説するものであった。調査に協力してくれた学部1年生22名の全員が英語教育学を専攻しており、卒業後はほとんどが中高の英語教師になることを希望している。また、22名中14名が大学入学前までに英検準1級を取得している。

3.2. 調査材料

調査材料となる英語テキストには、『アメリカ名詩選』（岩波文庫）に収められている Lorenz Hart による詩、“Falling in Love with Love” を使用した¹。調査では、詩のタイトルと詩全体を、省略や書き換えをすることなく提示した。提示した通りを引用する。

Falling in Love with Love

Falling in love with love is falling for make-believe.

Falling in love with love is playing the fool.

¹ この作品は、正確にはミュージカルの挿入歌の歌詞であり、『アメリカ名詩選』には次のような紹介文が載せられている。「作曲リチャード・ロジャース Richard Rodgers (1902-79)、作詞ローレンツ・ハートという名コンビが1938年に作ったミュージカルの傑作、*The Boys from Syracuse* からの歌。のちのジャズやポピュラーのスタンダード・ナンバーになった。」(p.330)

Caring too much is such a juvenile fancy.
Learning to trust is just for children in school.
I fell in love with love one night
When the moon was full.
I was unwise, with eyes
Unable to see.
I fell in love with love,
With love everlasting.
But love fell out with me.

この詩を調査材料に選んだ主な理由は次の3点である。(1)言語的なわかり易さ: 1938年に書かれた詩ではあるが、英語に古臭さはなく、また語彙や文法も難解ではない。(2)内容的なわかり易さ: タイトル「恋に恋して」(“Falling in Love with Love”)に示されているように、内容が恋愛であって、本調査の協力者にも比較的わかり易い。(3)調査に適した長さ: 詩全体で71単語しかないため、授業時間の一部を割いて実施される本調査に適した長さである(実際には35分間で全調査を終えた)。

3.3. 調査手順

調査は、令和4年7月末に行われた授業の最後の35分間で一斉に行われた。コロナ禍にあって授業履修者同士の会話は大学から禁じられていたこともあり、ペアやグループで話し合うことはなく、協力者は終始個人で調査に取り組んだ。なお、調査実施までに授業そのものは終了しており、調査に充てられた時間は学生の学習機会を奪うものではなかった。また、本調査は広島大学人間社会科学研究所研究倫理審査に合格の上実施されたものであり、調査の直前にはプライバシーの保護等について紙面と口頭の両方で説明が施された。

調査手順は次の(1)～(4)の通りであった(各手順の所要時間を括弧内に示す)。

- (1) 調査の目的等を記載した紙を用いながら調査の説明を行った。(3分)
- (2) 資料1の用紙(実際のサイズはA4)を配布し、黙読に取り組んでもらった。(10分)

資料 1：黙読の際に配布した用紙

課題 1：次の英語を黙読し、気になった個所に下線を引き、その理由を直接日本語で書き込んで下さい。

*辞書を使っても構いませんが、この英語を自動翻訳したものやネット上の翻訳は見ないで下さい。

Falling in Love with Love

Falling in love with love is falling for make-believe.

(以下、詩本文省略)

- (3) 資料 2 の用紙 (実際のサイズは A4) を配布し、和訳に取り組んでもらった。(17 分)

資料 2：和訳の際に配布した用紙

課題 2：同じ英語を今度は日本語に訳して下さい (タイトルも含む)。また、訳をする上で気になった個所に下線を引き、その理由を直接日本語で書き込んで下さい。

*辞書を使っても構いませんが、この英語を自動翻訳したものやネット上の翻訳は見ないでください。

Falling in Love with Love Falling in love with ... (以下、詩本文省略)	和訳 (以下、和訳欄省略)
---	------------------

- (4) 資料 3 の用紙 (実際のサイズは A4) を配布し、課題 1 の黙読と課題 2 の和訳について自由に感想を記述してもらった。(5 分)

資料 3：感想を自由に記述してもらう際に配布した用紙

課題 3：課題 1 では黙読に、課題 2 では和訳に取り組んでもらいました。ふたつの課題に関し、感じたことを自由に書いて下さい。課題 1, 2 で自分が書いたことを見返しても構いません。

(以下、自由記述欄省略)

以上が調査の手順であるが、(2)で黙読に取り組んでもらったのは、テキストを読む際はまずは黙読を行うのが通常であると考えたからである。この通常の読

み（黙読）との比較を通し、和訳が学習者に与える影響を探ろうと考えた。

4. 調査の結果と分析

上記課題1～3から成る調査で得られたデータは次の4点である。

- データ1：課題1（黙読）における下線と、下線を引いた理由
- データ2：課題2（和訳）における下線と、下線を引いた理由
- データ3：課題2（和訳）における和訳そのもの
- データ4：課題3における自由記述

データ1と2は、課題1の黙読と課題2の和訳において「気になった個所に下線を引き、その理由を直接日本語で書き込んで」もらった結果得られたものである。課題1と2の意図は、気になった個所とその理由をはっきりさせることで、黙読と和訳の違いを協力者に意識させることにあった。実際、課題3ではほとんどの協力者が黙読と和訳を比較させながら自由記述を行った。この課題3で得られたデータ4を中心に他のデータにも適宜触れながら結果を示し、分析を加える。なお、わかり易さのため、22名の協力者には番号を振って、協力者1～22としている。

4.1. 課題3の結果（データ4）と分類

黙読と和訳に関する自由な感想を求めた課題3の結果（データ4）から、黙読と和訳を協力者は様々な観点から比較していることがわかった。示された様々な観点は次の5つに分類される（括弧内は各観点を挙げた協力者の人数）。

- 観点1：和訳には解釈が伴うと感じた（5名）
- 観点2：和訳によって難度が上がった（11名）
- 観点3：和訳によって理解度が上がった（4名）
- 観点4：黙読では音に、和訳では文法に着目した（1名）
- 観点5：黙読では文法に、和訳では語感に着目した（1名）

5つの観点別に、全協力者22名が実際に書いた感想を表1に示す。

表1 課題3での自由記述と比較の観点

比較の観点	課題3での自由記述
観点1： 和訳には解 釈が伴うと 感じた	<p>12 日本語訳を一つ一つしていく時は、黙読の時より解釈の仕方が変わりました。日本語訳では日本語だけで意味が通じるように、英語を直訳するだけでなく自分で解釈をひろげ、そのひろげた解釈を日本語で表現しようとしました。日本語訳の時は解釈を付け足していつているイメージがしました。</p> <p>15 映画の字幕に通ずるものを感じた。直訳ではなくどこか解釈を込めた訳が大事なのではないかと思う。</p> <p>16 文の1つ1つは意味が分かるが、全体として何が言いたいのかははっきりしておらず、詩のようだったので和訳するときには直訳のままでもいいのか少し迷った。もっと深い意味がありそうだと考えた。</p> <p>21 ただなんとなく読みより、和訳しようとするより深く考えてしまって falling in love with love が浮気のことでは? と思ってしまった。考えすぎて脱線したかもしれないが、やっていて楽しかった。</p> <p>22 課題1では基本的に文法や文構造にしか目がいかなかったが、課題2で訳すとなったときに、1つ1つの言葉がどういう意図で選ばれたのか、裏を読んだり深く読んだりしようとする自分があることに気がきました。</p>
観点2： 和訳によっ て難度が上 がった	<p>1 単語は分かるけど、文のつながりを考えながら和訳することがとても難しいと思った。</p> <p>2 課題1ではさらっと読んで違和感を抱かなかった部分が、課題2で和訳しようすると、どんどん気になった。文法的にどう訳せばいいかははじめは考えていたけど、だんだん自分のワードセンスを試すのが楽しくなっていった。</p> <p>3 falling in love with love を恋に恋すると訳したが、love は愛と訳す認識だったので、恋と訳すことに違和感があった。</p> <p>4 課題2の和訳において、直訳をしたのでは筆者の言いたいこと、伝えたいことが全然汲み取れないと思った。文構造は非常に簡単だけど、それゆえに単純な表現の意味を考えるのが難しかった。</p> <p>6 詩のように作者が伝えたいことを暗示しているような文章は、直接日本語にすれば良いというわけではないという思いが強く、あまり意味のわからない和訳になってしまった気がする。</p> <p>7 課題1では気になった個所をバツと選んでそのみの理解に集中してしまっ。課題2で全体を訳そうとすると、課題1で下線を引いた所がなんだか違う理解に思えてきて不思議な感じがしました。もう少し、詩の全体像をバツと捉えられたらよかったなと思います。</p> <p>9 難しい単語や文法が頻繁に使用されているわけではないのに、和訳しにくいように感じました。日本語にすると不自然だったり、くどかったりしてしまったので、所々意識を踏まえながら取り組みました。falling in love with love の2つのlove がどのように区別して用いられているのか、もしくは同じ意味で用いられているのが最も気になりました。</p> <p>10 黙読だと何となくニュアンスで読み進めてしまうので厳密な意味までわざわざ調べようとは思わないが、和訳するとなるとより適切な訳し方や文法までじっくり考えるようになったと感じた。</p> <p>13 課題1でも訳をしながら読んでいったので正直課題2とやっていることは変わらないのだが、文字におこして訳そうとすると、言いまわしや表現の工夫を、直訳では表現しきれなかった。</p> <p>19 英語の文章を読んで感じたことを日本語に訳すことは難しいと感じた。直訳すると訳のわからない文章になった。</p> <p>20 何を伝えたい文章なのか分からなかった。単語は大体分かるのに、訳すことができない。課題1の黙読では自分の頭の中で考えてフィーリングで何となく読んでいたが、課題2で和訳する時は文字にするのが難しかった。</p>

観点3： 和訳によって 理解度が 上がった	8 課題1では一文一文だけを考えていたが、課題2では訳してみることで、より前後の文の関係を意識するようになった。時間はもちろん、手間も課題2の方がかかったが、文章の理解度は課題2の方が高かった。
	11 黙読して気になるところを選んだが、実際に和訳して可視化してみると、黙読時に疑問に思っていたところがそこまで気にならなくなった。
	17 黙読時に疑問だった所も少し理解できた気がした。
	18 ただ単に気になった個所を黙読で探すよりも、自分で和訳しながら気になる個所を探す方がやりやすく、考えやすかった。
観点4： 黙読では音に、和訳では文法に着目した	5 課題1の段階では発音や流れなどに意識が向き、課題2では文法的なものに意識が向いた。課題1の時点で詩のようなものと思っていたため、課題2に取り組む際、適切な日本語を考えるのに苦労した。
観点5： 黙読では文法に、和訳では語感に着目した。	14 課題1では文法的に気になる部分に着目したと思う。課題2では文法というよりも、英語から日本語に訳したときの語感の違和感に着目したと思う。Falling in love with は「恋に落ちる」であるが、Falling in love with love だと「恋に恋に落ちる」となり訳に違和感を抱き、「恋に恋した」に改めた。

4.2. 観点1～3に関する考察

表1の5観点のうち、複数名が挙げた観点1～3について考察する。

4.2.1. 観点1に関する考察

観点1の「和訳には解釈が伴うと感じた」は5名の協力者によって示された。表1の自由記述にあるように、協力者12と15は「解釈」という文言を実際に使用しながら、和訳には解釈が伴うと指摘している。協力者16、21、22は、「解釈」という表現は使わないまでも、和訳には深い読みが求められると指摘しており、観点1に分類することにした。

調査では「解釈」という表現には全く触れなかったものの、5名の協力者が和訳することに解釈が伴うと感じたのは注目に値する。

4.2.2. 観点2に関する考察

観点2の「難度が上がった」には、最多の11名の自由記述が分類された。ここで留意すべきは、「難しさ」が、単語や文法といった英語の難度を指しているのではないことである。むしろ、「文構造は非常に簡単」(協力者4)であり、「単語は(大体)分かる」(協力者1、20)と感じたようである。では、なぜ、協力者9のような感想(「難しい単語や文法が頻繁に使用されているわけではないのに、和訳しにくいように感じました」)が出されたのであろうか。それは、和訳には、正確な意味理解以上のものが求められると認識したからだと考えられる。協力者2の自由記述を表1から再掲する。

協力者2の自由記述：課題1ではさりと読んで違和感を抱かなかった部分
が、課題2で和訳しようとすると、どんどん気になった。文法的にどう訳
せば良いかをはじめは考えていたけど、だんだん自分のワードセンスを試
すのが楽しくなっていった。

黙読における意味理解にはさほど困難さを感じなかったものの、和訳では、意味
を理解していたと思っていた部分が改めて気になり、「自分のワードセンス」が
試されるような気がしたという記述である。言い換えると、和訳には、正確な意
味理解に加え、その意味理解に基づいた解釈が求められる気がしたということ
であろう。

協力者4, 6, 13は、「直訳」（あるいは、それに近い訳し方）に触れながら次
のように記述している。

協力者4の自由記述：直訳をしたのでは筆者の言いたいこと、伝えたいこと
が全然汲み取れないと思った。

協力者6の自由記述：詩のように作者が伝えたいことを暗示しているよう
な文章は、直接日本語にすれば良いというわけではない・・・。

協力者13の自由記述：言いまわしや表現の工夫を、直訳では表現しきれな
かった。

作者の意図を汲み取ったり、原文の言いまわしを表現したりするには直訳は不十分
であり、解釈を伴った訳が求められるという認識が、協力者4, 6, 13の自由
記述から読み取れる。課題2の和訳では気になる個所に下線を引いてもらった上
で、その理由も書いてもらったが、課題2から得られたデータ2における協力者
13の回答は次の通りであった。

課題2の和訳における協力者13の回答：

Learning to trust is just for children in school.

表しているのは過程なのか、経験なのか。

I fell in love with love one night

When the moon was full.

I was unwise, with eyes

「賢くない」なのか、「愚か、浅はか」なのか。

下線が引かれている2箇所はいずれも、課題1の黙読では下線が引かれていなかった。和訳において協力者13は Learning to trust と unwise の解釈を試みたようである。

4.2.3. 観点3に関する考察

4名の自由記述が分類された観点3は、「和訳によって理解度が上がった」というものである。この観点3に分類された協力者8の次の自由記述に注目したい。

協力者8の自由記述：時間ももちろん、手間も課題2の方がかかったが、文章の理解度は課題2の方が高かった。

和訳の方が理解度は高いのに時間も手間もかかったのは、この「理解」が単なる正確な意味理解というよりも、解釈を施した結果得られた理解を指しているからではあるまいか。このことを検証するために、課題2（和訳）で得られたデータ2とデータ3を次に見てみたい。

観点3に分類された4名のうち協力者11と17は、課題2では下線を引いておらず、無回答であった。課題2において下線を引いていた協力者8と18のデータ2とデータ3から、該当部分のみを引用し、考察を加える。

協力者8の下線とコメント、和訳は次の通りであった。

課題2における協力者8の回答（データ2から引用）：

Caring too much is such a juvenile fancy.

Learning to trust is just for children in school.

大人の愛には気づかぬ信頼もいらぬことを描写している？

課題2における協力者8の和訳（データ3から引用）：

気にし過ぎるのは思春期の空想のようなもの。

信頼することを学ぶのは学校にいる子供だけ。

データ3の和訳を見る限り、協力者8はこの2行の意味を正しく理解していると判断される。一方で、データ2にある通り、この2行には下線を引いて、「大人の愛には気づかぬ信頼もいらぬことを描写している？」ともコメントしている。これは、意味を正しく理解した上で、詩に実際使われている“juvenile”や“children”から、それとは逆の「大人」の在り方を暗示的に読み取ろうとしているからではあるまいか。つまり、和訳の過程で解釈を試みていると考えられる。

協力者 18 の下線とコメント、和訳は次の通りであった。

課題 2 における協力者 18 の回答（データ 2 から引用）：

Caring too much is such a juvenile fancy.

なぜ急に回想シーンがくるのか？

課題 2 における協力者 18 の和訳（データ 3 から引用）：

恋に憶病になりすぎるのは子供らしい空想。

「なぜ急に回想シーンがくるのか？」というコメントのみでは、誤読とも取れる。しかし、和訳は「子供らしい空想」としていることから、“juvenile fancy”の意味は正しく理解していると考えられる。協力者 18 は、恐らく、詩の語り手を大人と捉えた上で、その語り手が「子供らしい空想」を抱いた過去を「回想」していると解釈し、「回想シーン」というコメントを書いたのではあるまいか。

この観点 3「和訳によって理解度が上がった」と先の観点 2「和訳によって難度が上がった」は、一見矛盾するようで、実際は矛盾しない。というのも、両観点とも原因が解釈にあると考えられるからである。解釈によって困難さを感じる（観点 2）か、理解度が上がったと感じる（観点 3）かは、協力者の感じ方の違いに過ぎない。肝要なのは、いずれの感じ方にせよ和訳には解釈が伴うということである。

5. 研究成果と今後の課題

本論の研究課題は次の通りであった。

研究課題：英語詩を和訳することは英語学習者に解釈を促すのか。

この研究課題における解釈とは、「書かれたものを、その言語等の妥当な意味理解に基づいて、読者がそれなりの説得性をもって自由に展開する読み」のことである（本論「2. 仮説と研究課題」参照）。この研究課題に取り組むため、本論では高校卒業後間もない学部 1 年生 22 名を対象に調査を実施した。調査において協力者は、Lorenz Hart 作“Falling in Love with Love”の黙読と和訳に取り組んだ。この条件下において、本論では次のような成果が得られた。

研究成果：

- ・調査協力者 22 名中 5 名は、英語詩を和訳することには解釈が伴うと感じ

た。

- ・調査協力者 22 名中 11 名は、英語詩を和訳することによって難度が上がったと感じたが、その一因は解釈にあると考えられる。
- ・調査協力者 22 名中 4 名は、英語詩を和訳することによって理解度が上がったと感じたが、その一因は解釈にあると考えられる。

これらの研究成果から、英語詩を和訳することは英語学習者に何らかの解釈を促すと言えよう。

最後に、本論では扱いきれなかった課題のうち大きなものを 2 点挙げておく。1 点目は、英語詩を和訳することによって促されたような解釈が、物語といった他のナラティブや、説明文でも促されるのかを探ることである。2 点目は、解釈が「生徒が興味をもって取り組める言語活動」に本当になり得るのかを検証することである。本論では、仮説「生徒の興味を掻き立てるような活動が、和訳を通じ学習者に解釈を促すことによって実践される」のうち、下線部のみを扱った。本論の冒頭で触れたように、『学習指導要領』上育成されるべき資質・能力である「学びに向かう力、人間性等」を涵養する手立てとして、「生徒が興味をもって取り組める言語活動」が『解説』には挙げられている。今後は、和訳に取り組むことによって促された解釈が、生徒の興味を本当に掻き立てるのかをより直接的に探る必要がある。

広島大学

* 本論は、科研費助成事業の学術研究助成基金助成金（2018 年度基盤研究（C））課題番号 18K00374「文学の原作とそのリトールド版との比較に基づいた英語学習法及び教材の開発」（研究代表者：小野 章）の補助を受けて執筆された。

引用文献

- Cook, G. (2010). *Translation in language teaching*. Oxford University Press.
- DuBravac, S. & Dalle, M. (2002). Reader question formation as a tool for measuring comprehension: narrative and expository textual inferences in a second language. *Journal of Research in Reading*, 25(2), 217-231.
- Rosenblatt, L. M. (1978). *The Reader, the Text, the Poem: The Transactional Theory of the Literary Work*. Southern Illinois University Press.
- Rosenblatt, L. M. (1995). *Literature as Exploration. Fifth Edition*. Modern Language Association of America.

- エーコ, U. (1993). 「著者とテキストの間」. In コリーニ, S. (編), 『エーコの読みと深読み』(柳谷啓子・具島靖(訳)). 岩波書店. (原著は1992年出版)
- エーコ, U. (2002). 『開かれた作品』(篠原資明・和田忠彦(訳)). 青土社. (原著は1967年出版)
- 小野 章・平川 真・柿元麻理恵 (2016). 「教師による文学解釈が学習者の読解に与える影響」『広島外国語教育研究』19, 213-224.
- 小野 章・清水奈美 (2018). 「英語教育におけるポストモダン絵本の活用—Shaun Tan 作 *The Red Tree* をめぐる日本人英語学習者の多様な解釈に焦点をあてて—」『広島外国語教育研究』21, 229-244.
- 亀井俊介・川本皓嗣(編)(1993). 『アメリカ名詩選』(岩波書店).
- 文部科学省(2018). 『高等学校学習指導要領解説(平成30年告示)解説 外国語編 英語編』開隆堂.

Does Translating an English Poem into Japanese Stimulate Learners' Interpretation?: A Study on How to Use Literature in English Language Education

Akira Ono and Sumire Umakoshi

The three main learning objectives specified in *The Course of Study for Senior High Schools* (revised in 2018) are students' acquisition of (1) knowledge and skills, (2) ability to think, make decisions and express themselves, and (3) power toward learning and humanity. *The Practical Guide of the Course of Study for Senior Schools for Foreign Languages* claims that "language activities that can generate interest among students" are vital for students to acquire (3) power toward learning and humanity.

Ono, Hirakawa & Kakimoto (2016) found that interpretation of literature can enhance students' interest. The limitation of this study lies in the fact that the interpretation was conducted by a literature professor. To use a professional interpretation in senior high schools would be impractical.

To make interpretation more accessible, this paper hypothesizes that translating English into Japanese, which is not unusual in high school English classes, would help students interpret a literary text. The use of L1 (the first language) is being reevaluated in the EFL (English as a Foreign Language) classroom, mainly by advocates of TILT (Translation in Language Teaching). The relationship between the use of L1 and interpretation has not been examined in TILT yet. Traditionally in Japan, L1 (Japanese) has been used in English classes, especially in grammar-translation classes. The purpose, however, is for students to understand the literal meaning of English, not to interpret a certain English text.

The research question of this study is: Does translating an English poem into Japanese stimulate learners' interpretation? To answer this question, an experiment of thirty-five minutes was conducted in a class taught by one of the authors (Akira Ono). This class was chosen because the attendants were first-year university students, close in age to the target learners (high school students) of this study. The literary text used in the experiment was "Falling in Love with Love," a musical lyric by Lorenz Hart. This lyric is included in *American Best Poems*, an anthology of one hundred poems published by

Iwanami Shoten. The reasons for choosing this text are its linguistic simplicity, topic familiarity, and length (just 71 words). In the experiment the twenty-two subjects were asked to: (1) underline the parts of the English lyric that caught their attention while reading and write down the reasons for underlining them; (2) write down the Japanese translation of the same lyric; and (3) underline the parts that caught their attention while translating and write down the reasons for underlining them as they did in (1). Then, they were asked to: (4) write freely about how they felt about translating the lyric.

The data collected in (4) were analyzed and categorized into five groups. Group one (five subjects) wrote that translating the lyric entailed interpretation. Group two (eleven subjects) wrote that translating the lyric made the lyric more difficult. Group three (four subjects) wrote that translating the lyric led to better understanding of the lyric. Our conclusion is that the subjects categorized into these three groups, though different in what they actually wrote, found translating the English lyric into Japanese stimulated their interpretation. This conclusion was also supported by the data collected in (2), namely, the actual translations the subjects produced.

Hiroshima University